

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02824

研究課題名(和文) BE動詞の文法化

研究課題名(英文) The Grammaticalization of the Verb BE

研究代表者

保坂 道雄 (HOSAKA, Michio)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：10229164

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、BE動詞は英語の通時的過程の中で文法化した結果できたものであることを、英語の歴史的言語コーパスに基づき実証的に論じた。具体的には、YCOEを資料として、古英語期に、「存在」の意味を持つ本動詞のBEがPredPの主要部となるコピュラやPassivePの主要部となる助動詞に文法化したことを論じ、PPCME2、PPCEME等を資料として、中英語以降、こうしたBE動詞が主要部となる機能投射構造が確立したことを論じた。また、Google Books、EEBO、COHA等を資料として、近代英語以降、BE動詞が主要部を占めるPerfectPが急速に衰退したことを検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

BE動詞は、英語の最も基本的な動詞であるがその機能は多岐に渡り、如何にしてこうした変化が生じたかについては実証的研究が少なく、更なる研究が望まれていた。本研究では、最新の言語理論(極小主義理論等)に基づく考察と近年着目されている進化言語学の視点に立脚し、文法化に基づく新たな見解を示したものである。また、その際、英語の歴史的言語コーパスを利用して、実証的側面からも計量的議論を行った。今後の歴史言語研究に新たな視点を加えたことが期待できる。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the grammaticalization of the verb BE and, with the statistical analysis of the historical corpora of English (YCOE, PPCME2, PPCEME, etc.), discussed that it grammaticalized in the historical change from Old English to Modern English. Specifically, it was argued that the main verb BE meaning 'exist' grammaticalized into a copula, which was the head of PredP and the head of PassiveP, in the Old English period and after the Middle English period it was established as the head of Functional Projections. Furthermore, with the statistical analysis of Modern English Corpora such as Google Books, EEBO and COHA, it was argued that PerfectP whose head was the auxiliary verb BE declined rapidly after the Modern English period.

研究分野：英語学

キーワード：文法化 BE動詞 古英語 中英語 近代英語 受動態 完了形 進行形

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の土台となる「文法化(Grammaticalization)」の考え方は、20世紀初頭に Meillet(1912)により提唱されたものであるが、1980年代から再び脚光を浴び、Hopper and Traugott (2003[1993])により通時的及び共時的の研究として確固とした研究分野として確立している。その後も、研究の裾野が広がり続けており、現在でも強い関心を集めている(Narrog and Heine (2011, 2021)等)。

その中心となる主張に、Lexical Items(LI)から Functional Items(FI)への一方向的变化があり、BE動詞もまた、LI(「存在」の本動詞 BE)から FI(受動態、完了形、進行形の助動詞 BE)へと変化してきた。実際、これまでも受動態、完了形、進行形の発達については、多くの英語の通時的研究(伝統文法的及び文献学的研究としては、Jespersen(1909-49), Visser (1963-73), Mitchell (1985), Denison (1993)など、近年の理論的研究としては、van Gelderen (2004, 2011), Roberts (2007), Roberts and Roussou (2003)など)が存在し、様々な議論がなされてきた。しかしながら、こうした研究の多くは、それぞれの言語事象に特化した議論で、その背後にある BE 動詞の役割についてはほとんど考察が行われていない。

そこで、本研究では、2014年に出版した拙著(保坂(2014))において主張した機能投射構造(Functional Projection、以下 FP とする)の創発が、こうした BE 動詞の文法化と深く関わることを、経験的資料をもとに実証的に論じていく。具体的には、図1に示す BE 動詞の文法化過程が想定される。

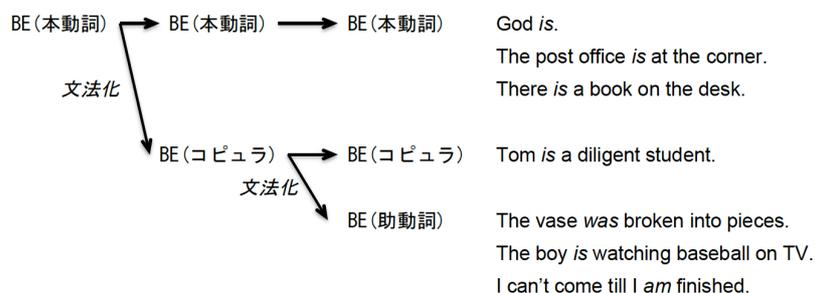


図1 BE 動詞の文法化

すなわち、存在の BE 動詞からコピュラへと文法化し、やがて助動詞 BE に再度文法化したという変化である。また、この変化の背後には、存在の本動詞である BE が叙述構造(Predication)を形成する機能投射構造 PredP の主要部となり、やがて、受動態、進行相、完了相の素性を主要部とする機能投射構造 PassiveP や ProgressiveP が創発したと考えられる。そして、これこそ、現代英語の BE 動詞が3つの状態で現れている要因と想定される。こうした仮説の妥当性を、本研究にて実証的に検討する。

2. 研究目的

現代英語の BE 動詞は、本動詞、コピュラ(連結詞)、助動詞という文法的に異なる意味・機能を持ち、その使用範囲も広い。しかし、なぜこうした3つの形式で BE 動詞が存在しているかについての共時的及び通時的な総合的研究は十分なされていない。そこで、本研究では、こうした BE 動詞の多様な用法は、英語の通時的变化の中で、BE 動詞が文法化した結果であるとし、その過程について共時的及び通時的に詳細な分析を行うものである。特に英語は、受動態、進行形、完了形においても、BE 動詞は重要な役割を担っており、それぞれの通時的発達については

これまでも多くの研究がなされている。本研究では、こうした助動詞用法の発達の背後にも、BE 動詞の文法化が深く関わっていることを明らかにし、統一的な説明を目指すものである。

3. 研究の方法

本研究は、理論的研究方法と実証的研究方法の両側面を持つ研究である。前者に関しては、極小主義的視点と進化言語学的視点を融合し、新たな言語理論的考察を行っている。また、後者に関しては、各種通時的言語コーパス (YCOE, PPCME2, PPCEME, Google Books, EEBO, COHA 等) 利用して計量的分析を行い、本研究で提示した仮説の妥当性を検証した。

4. 研究成果

2017 年度では、まず、BE 動詞の用法についての基本的文献を集め考察を行った。対象とした研究は、Bowers (1993), den Dikken (2006), Heggie (1988), Moro (1997, 2000), Pustet (2003), Progovac (2015), Williams (1994, 2003) 等多岐にわたる。特に BE 動詞がコピュラとしてどのような機能を有しているかに関して考察を進め、Bowers や Moro 等が仮定する PredP の構造の中核をなすと考える。その上で、こうした機能投射構造が如何に創発したかについて次のような実証的な議論を行った。2017 年5月の日本英文学会では、「機能範疇創発のメカニズム」の題目のもと、コピュラの BE が PredP の主要部であることを YCOE 等のコーパスをデータとして検証を行った。なお、その際の議論は日本英文学会第 89 回大会プロシーディングに掲載された。また、同年7月の英国リーズ大学で開催された International Medieval Congress においては、“Ambiguity between the BE Perfect and the BE Passive in Old English”の題目のもと、古英語における BE+過去分詞の構文の意味と構造について、古英語の福音書マタイ伝を資料として、議論を行った。その際、古英語訳の原文であるラテン語との比較を通して、古英語の BE+過去分詞の構造的曖昧性について詳細に分析を行った。

2018 年度では、BE+現在分詞と BE+過去分詞が、それぞれ現在進行形及び受動態として確立する過程に関して、自作の聖書の時代別パラレルコーパスに基づき、考察を進めたものである。また、特にその萌芽的状况にあった古英語に焦点をあて、現在進行形や受動態の構造が確立する以前にどのような構造を想定すべきであるかを考察した。その成果は、2018 年5月に出版された『英語学が語るもの』(くろしお出版)の中に収められた論考「変幻自在な BE 動詞の謎」として発表した。本論文では、古英語において、BE+現在分詞及び BE+過去分詞にそれぞれ、4 つの用法 (Appositive, Verbal, Adjectival, Nominal) があったことを確認し、統語的には本動詞の BE を中心とした構造、コピュラの BE を中心とした構造に分類可能であることを論じた。また、中英語に Passive 構造([_{FP} NP [_{F'} BE+F<Top>] [_{FP} NP [_{F'} BE+F<Pass>] [_{VP} NP PP(=V)]]]) が確立し、近代英語期に Progressive 構造([_{FP} NP [_{F'} BE+F<Top>] [_{FP} NP [_{F'} BE+F<Prog>] [_{VP} NP PrP(=V)]]]) が確立したと主張した。受動態と進行形の発達を説明する新たな視点であり、更なる研究に繋がるものである。

2019 年度では、当初 BE+過去分詞を含む構文について古英語のみを中心に分析を行う予定であったが、それまでの2年間で既に古英語・中英語の BE+過去分詞の構造についてはある程度考察を進めているため、古英語から近代英語までの同構造について分析を行うこととした。特に、BE + 過去分詞の完了用法の盛衰に着目し、古英語・中英語においては自動詞の過去分詞と共に使われることが多かった同構文が、近代英語以降、急速に衰退する状況を詳細に分析した。その際、言語資料として、従来の YCOE, PPCME2, PPCEME 等の小規模コーパス (各 150 万語程度) だ

けではなく、EEBO(約 7.5 億語)、COHA(約 4 億語)、Google Books(約 4,680 億語)の大規模コーパスを用いた調査を行った。その結果、1800 年以降、go 等の一定の動詞を除いて BE+過去分詞の完了構文が急速に衰退する様子を細かく捉えることが可能となった。なお、本研究結果は、2019 年 12 月に開催された日本人間行動進化学会(明治学院大学)、日本歴史言語学会(広島大学)、2020 年 1 月に開催された国際学会 ISALR(別府)にて、発表を行った。また、同時に、英語における機能投射構造の通時的発達に関する理論的考察として、その創発現象的側面の研究を行い、形式理論的考察と認知意味論的考察の双方の重要性を論じた。なお、その研究結果は、2020 年 3 月に開催された国際学会 HICELLS(ハワイ大学)にて、発表を行った。

2020 年度は、BE+過去分詞を含む構文について中英語のみを中心に分析を行う予定であった。しかしながら、当初の2年間で既に古英語・中英語の BE+過去分詞の構造についてはある程度考察を進めているため、当該年度も前年度に引き続き古英語から近代英語までの同構造の変化全般について分析を行うこととした。特に、BE + 過去分詞の完了用法を HAVE + 過去分詞の完了用法と比較し、近代英語以降、急速に衰退する状況を詳細に分析した。その際、言語資料として、EEBO、COHA、Google Books の大規模コーパスを主に用いて調査を行った。その結果、1775 年から 1825 年にかけて急速に HAVE 完了の頻度が高まり、この間に BE 完了から HAVE 完了への変遷が起きたことが実証できた。なお、本研究結果は、2020 年 6 月に開催された人工知能学会全国大会(オンライン)、及び同年 7 月に開催された 6th International Conference on Computational Social Science(国際学会、オンライン)にて口頭発表を行い、『歴史言語学』第 9 号、及び EVOLANG XIII Proceedings にて論文として公表した。

2021 年度は、BE + 現在分詞・過去分詞を含む構文について近代英語を中心に分析を行う予定であった。しかしながら、これまでの4年間で既に古英語・中英語・近代英語の BE+現在分詞・過去分詞の構造についてある程度考察を進めているため、近代英語を含めた通史的研究を行うこととした。また、当該年度は研究期間の最終年度にあたるため、英語の BE 動詞の文法化に関する総括的議論を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、国内外での研究発表の機会が限定され、予定していた研究活動が停滞せざるを得なかったため、研究期間を1年延長することとした。そのため、総括的議論は次年度行うこととなった。この間、特に注力した研究は、BE 動詞が他の助動詞と共に形作る多重連鎖構造の分析である。現代英語では、He might have been skinned alive.のような多重助動詞構造が観察されるが、古英語や中英語での使用は限定的なものであった。特に古英語では、法助動詞 + BE + 過去分詞が多勢を占め、その後、完了形や進行形との共起が見られるようになることが確認された。これは、構造的見地からすると、AuxP と PassiveP の出現のあと、PerfectP や ProgressiveP が出現したと想定されるものであり、適応的言語進化の好例であると考えられる。こうした点に関して、日本英文学会や米国言語学会(LSA)にて研究発表を行った。

2022 年度では、中英語及び近代英語の BE + 現在分詞・過去分詞を含む構文を対象として研究を行った。また、当該年度は研究期間の最終年度にあたるため、英語の BE 動詞の文法化に関して総括的な議論をおこない、本研究結果をまとめる準備期間とした。この間、特に注力した研究は、BE 動詞が他の助動詞と共に形作る多重連鎖構造の分析である。現代英語では、He might have been being bullied.のような多重助動詞構造が観察されるが、古英語や中英語での使用は限定的なものであり、その後、完了形や進行形との共起が見られるようになることが確認された。なお、通時的言語コーパス(PPCME2 及び PPCEME)を用いて、中英語になると、法助動詞 + BE/HAVE + 過去分詞/現在分詞の語順が大部分を占めるようになり、近代英語ではこの語順が固定化したことを検証した。これは、英語の統語構造が適応的に変化した結果であり、言語の文化進化の好例であると考えられる。こうした点について、2022 年 9 月に開催された国際会議 The Joint Conference on Language Evolution にて研究成果を発表した。

最後に、現在本研究の総まとめとして BE 動詞の文法化に関する論考を執筆中であるが、その一部は 2023 年 6 月に開催される近代英語協会 30 周年記念大会及び同年 10 月に開催される英語語法文法学会第 31 回大会にて、研究発表を行う予定である。

< 引用文献 >

- Bowers, John (1993) "The syntax of predication," *Linguistic Inquiry* 24(4), 591-656.
- Denison, David (1993) *English Historical Syntax*, Longman, London.
- Dikken, Marcel den (2006) *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Heggie, Lorie (1988) *The Syntax of Copular Structures*, Unpublished doctoral dissertation, University of Southern California.
- Gelderen, Elly van (2004) *Grammaticalization as Economy*, John Benjamins, Amsterdam.
- Gelderen, Elly van (2011) *The Linguistic Cycle*, Oxford University Press, Oxford.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (2003[1993]) *Grammaticalization*, 2nd ed., Cambridge University Press, Cambridge.
- 保坂道雄 (2014) 『文法化する英語』, 開拓社, 東京.
- Jespersen, Otto (1909-49) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, 7 vols. Carl Winter, Heidelberg.
- Meillet, Antoine (1912) "L'évolution des forms grammaticales," *Scientia* (Rivista di Scienza) 12, no. 26.6.
- Mitchell, Bruce (1985) *Old English Syntax*, 2 vols, Clarendon, Oxford.
- Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Moro, Andrea (2000) *Dynamic Antisymmetry*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Narrog, Heiko and Bernd Heine (2011) *The Oxford Handbook of Grammaticalization*, Oxford University Press, Oxford.
- Narrog, Heiko and Bernd Heine (2021) *Grammaticalization*, Oxford University Press, Oxford.
- Progovac, Ljiljana (2015) *Evolutionary Syntax*, Oxford University Press, Oxford.
- Pustet, Regina (2003) *Copulas: Universals in the Categorization of the Lexicon*, Oxford University Press, Oxford.
- Roberts, Ian (2007) *Diachronic Syntax*, Oxford University Press, Oxford.
- Roberts, Ian and Anna Roussou (2003) *Syntactic Change*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Visser, F. T. (1963-73) *An Historical Syntax of the English Language*, 4 vols, E. J. Brill, Leiden.
- Williams, Edwin (1994) *Thematic Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Williams, Edwin (2003) *Representation Theory*, MIT Press, Cambridge, MA.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Michio Hosaka	4. 巻 1
2. 論文標題 Word Order Convergence in the History of English	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of the Joint Conference on Language Evolution	6. 最初と最後の頁 300-301
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michio Hosaka, Tomofumi Akiha	4. 巻 1
2. 論文標題 Habban + Past Participle of an Intransitive Verb in Old English	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Medieval English Syntax	6. 最初と最後の頁 99-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michio Hosaka	4. 巻 7
2. 論文標題 On the derivation of the three-verb clusters in Old English	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of the Linguistic Society of America	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3765/plsa.v7i1.5215	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 保坂道雄	4. 巻 70
2. 論文標題 書評：Elspeth Edelstein (2020) English Syntax (Edinburgh University Press)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 英文学論叢	6. 最初と最後の頁 65-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保坂道雄・奥田慎平・笹原和俊	4. 巻 9
2. 論文標題 ことばの変化と進化：英語の完了構文の盛衰をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史言語学	6. 最初と最後の頁 107-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michio Hosaka, Shimpei Okuda, Kazutoshi Sasahara	4. 巻 -
2. 論文標題 Evolutionary Forces in the Development of the English Perfect Construction	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 EVOLANG XIII Proceedings	6. 最初と最後の頁 168-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保坂道雄	4. 巻 1
2. 論文標題 変幻自在なBE動詞の謎	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語学が語るもの (論文集)	6. 最初と最後の頁 127-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michio Hosaka	4. 巻 1
2. 論文標題 Ambiguity between the BE Perfect and the BE Passive in Old English	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Aspects of Medieval English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 217-238
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保坂道雄	4. 巻 1
2. 論文標題 動詞rainをめぐって-非人称用法と人称用法の狭間で-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 <不思議>に満ちたことばの世界(論文集)	6. 最初と最後の頁 99-103
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保坂道雄	4. 巻 1
2. 論文標題 機能範疇創発のメカニズム	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本英文学会第89回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 103-104
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michio Hosaka	4. 巻 1
2. 論文標題 Micro vs. Macro Evolution of Language	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 2018 Arts, Humanities, Social Sciences & Education Proceedings	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件(うち招待講演 1件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 保坂道雄
2. 発表標題 理論の垣根を越えて: 進化言語学からの新たな視点
3. 学会等名 日本大学英文学会 2022年度年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Michio Hosaka
2. 発表標題 Word Order Convergence in the History of English
3. 学会等名 The Joint Conference on Language Evolution (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 保坂道雄
2. 発表標題 機能範疇の創発原理
3. 学会等名 日本英文学会 第93回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Michio Hosaka
2. 発表標題 On the derivation of the three-verb clusters in Old English
3. 学会等名 The 96th Annual Meeting of the Linguistic Society of America
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奥田慎平・保坂道雄・笹原和俊
2. 発表標題 大規模コーパスを用いた言語の文化進化の定量化
3. 学会等名 第34回 人工知能学会全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shimpei Okuda, Michio Hosaka, Kazutoshi Sasahara
2. 発表標題 Evolutionary Forces in the Development of the English Perfect Construction
3. 学会等名 6th International Conference on Computational Social Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 奥田慎平、保坂道雄、笹原和俊
2. 発表標題 英語の完了構文の進化ダイナミクス：複数の大規模コーパスを用いた検討
3. 学会等名 日本人間行動進化学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 保坂道雄、奥田慎平、笹原和俊
2. 発表標題 ことばの変化と進化－文化進化の事例研究－
3. 学会等名 日本歴史言語学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shimpei Okuda, Michio Hosaka, Kazutoshi Sasahara
2. 発表標題 Evolutionary forces in the development of the English perfect construction
3. 学会等名 25th International Symposium on Artificial Life and Robotics (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Michio Hosaka
2. 発表標題 The Emergence of Functional Projections in the History of English
3. 学会等名 Hawaii International Conference on English Language and Literature Studies
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 保坂道雄
2. 発表標題 機能範疇創発のメカニズム
3. 学会等名 日本英文学会第89回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Michio Hosaka
2. 発表標題 Ambiguity between the BE Perfect and the BE Passive in Old English
3. 学会等名 International Medieval Congress 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Michio Hosaka
2. 発表標題 Micro vs. Macro Evolution of Language
3. 学会等名 Hawaii University International Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 畠山雄二、本田謙介、保坂道雄、縄田裕幸、田中江扶	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明日香出版社	5. 総ページ数 415
3. 書名 英文法が身につく教養としての英語ことわざ100選	

1. 著者名 服部義弘、児馬修、清水 史、岡崎正男、堀田隆一、輿石哲哉、柳田優子、保坂道雄	4. 発行年 2018年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 200
3. 書名 歴史言語学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------